地上の天国の探索

岡　田　忠　軒

1

『序曲』はゴスラーの域壁から外のひろびろした野原へ出て行くことに象徴される，魂の拘禁状態からの解放感によって始められる。第1行に「ああ，このやさしい風に恵みがある！」（I）とうたい，大空から吹いてくる風を，「天上の息吹き」と感じ，自由の喜びに胸を躍らせる。

その風は「恍惚の思いと心の高まりをもたらし」，心の中にはその風に呼応して，やわらかい，創造を刺戟する風が吹き起こる。「この風はみずから作った事物の上をしずかに吹き渡り／嵐となり，その創造物をかきたてる／あふれるばかりの力となった……それは自分にもそれと分る力であり，嵐であり……音楽と詩の聖なる生活の希望をもたらす」といい，「来たるべきものに対する明るい自信」，「輝かしい 仕事への確信……申し分のない落着き，欠けるところのない幸福感」で詩人の心をみたす。

だが，じきにその期待は裏ぎられる。

「だが期待は挫かれてきた……勇を鼓して／ある高邁な主題に喜んで取り組もうとしても／その願いは空しい。どちらを向いても／日毎に新しい障害が生じてくる」

それは徒らに幻滅，失意を誘うのでなく，「いまはただ，もっとささやかな仕事のできる能力に／この高邁な望みを／明け渡すことで満足しよう」と，次のきっかけを静かに待とうとする。この予感と期待，挫折，そして静かな待機の反覆は本書の基調であり，詩人の精神的遍歴の歩みそのものである。その間を精神の高揚がしばしば訪れる。こうして恍惚たる至福の時の再来をつねに期待しながら，現実世界に確固たる自己の達成，実現を得ようとする願望が一貫している。この図式の全体のわく組として，開巻劈頭の「自由と創造への希望」が，ケンブリッジ，アルプス，ロンドン，フランス経験を主要な軸として，「人間精神への歓喜にみちた信頼と願望」に終るのが『序曲』の構成である。

学生時代のアルプス旅行は同じ期待と挫折と再生の経路を辿る。それはまたフランス革命の直接経験と重なっている。大陸を初めて踏んだとき，「ヨーロッパは喜びにわき／フランスは幸福の頂点にあり／人間が生れかわるように見えた……どんな国土の隅々にも触れずにいない春に似

て／かんばしい香りのように至るところ，慈愛と祝福がひろがっていた」(VI)のを感じ，地上の楽園の到来の期待に胸をはずませながら，歩を進める。そして「平和を好む好む人間の，神聖な住まい，家長らしい精神の威厳と，願望と意志のまじりけのない素朴さ」を谷間の家々に見た感動は，共和主義革命が大自然の中に包まれた人間固有の平和と尊厳に結ばれているという喜びによって一層深められた。

ついでモンブランの山頂の見えるところまで来たとき，「それ以上はありえないくらい，いきいきとした心を占めていたのに／魂を欠いたような山容を目のあたりにして，全く失望してしまった」のは後述するように，フランス革命の歓喜の頂点を過ぎたあとの虚脱感と思い合わせて印象的である。しかも，続いてアルプス山頂をめざし，そこに通じる一本道をひたすら登って行ったのに，それはいつしか下り坂になっていた。通りがかりの農民に聞くと，「わたしたちは，すでにアルプスを越えてしまっていた」とわかる。それを受けて人間のもつ想像力の偉大さが唐突にたたえられる。その後に続くのは，アルプスの頂上をきわめなかった失望を埋め合せるような光景である。それは「永遠の典型，象徴」として，激動と平和，暗黒と光明，の変転の世界を直視する諦観に通じる。前節の想像力の讃美とあわせて「絶えず希望をかき立てる」ものへの信念が力強く浮かび上がる。「われわれの運命と本性，人間の住みか，は無限の性質をともない，ただそれのみをもつ／それは希望，決して消しえない希望をともない／努力，期待，欲求と／常に起ころうとする何ものかがある」(VI)

2

この心理的経路は一貫して彼の生涯を縫つている。期待，希望が，挫折，失意，そして再生，諦観へと向う不屈の精神である。その間に人間への限りない信頼がうたわれ，その根拠となるのは想像力が人間すべてを高揚させる偉大な力として万人の心に宿るという確信である。彼に最も大きな影響を与え，本書で重要な位置を占めるフランス革命体験でも同じ経過が見られる。革命の息吹きに初めて触れて感動した第一回の大陸旅行についで，二回目にフランスに滞在したとき，彼を待っていたのは革命の初期の熱狂が去り，「碇泊中の船のように，嵐にゆすぶられ」(IX)不安定な動揺と焦燥を示しながら，「陽気さと投げやりな怠惰のさなかにある」世界だった。バスティーユの廃墟で「狂信者のふりをしながら，記念品」として小石を一つ拾ったとき，もはや最初の新鮮な感動はなく，革命は政治理論と諸党派の相克の複雑な局面を迎え，表面的には平静な，光のあせた日常の中にあった。「そこに見出せないもの，実際に感じた以上に／強い感情を動かすものを求めた」が，それはむだだった。だから「ルブランのマグダレーヌの絵ほどの感動もなかった」という。しかし間もなく激動がおそう。「みんな湧きたち……激情と意見の騒ぎ，衝突が平和な家々をも不穏な騒ぎでみたし」，彼に，「これまでのこと，これからのことも，なん

というこれは歴史の笑い草だろう」(IX)と嘆息させる事態となった。しかし「(もつと未熟な年少の頃から)国王の笏とか位階，等級などに眩惑させられることなく，むしろ歎かわしく，いとわしいものをそこに認め，最上の人々が支配していないのを見，最上の人々が支配すべきだと感じてきた」(IX)自由と平等を願う共和主義的心情は変らなかったし，「平等の権利と個人の価値によって成る政治」を歓迎する気持は強く残されていた。ボーピュイとの邂逅によりその思想に共鳴する素地があったのだ。だが「残虐行為と血なまぐさい権力」「自暴自棄の目的のために慈悲心を根こそぎにされた連中」「もとの十倍も強力となった暴君ども」が多数の狂気を作り出し，国内の大虐殺へとまっしぐらに進み，恐怖が希望にとって代つた。しかし絶望が希望の灯を完全に消しえなかったことは「この狂暴な時代の酷暑の中で」独裁政治の悪夢に脅かされる最中にも，彼はこの災禍を「人民政府と平等」という誤まった哲学の所産，などという嘲弄には組せず「(その原因は)人間の罪と無知の溜池が，時代から時代へと移るうちに充満し／もはや胸糞わるい汚濁をささえきれず／大洪水となって国中にあふれ出し，広がったものだ」(X)とし，この苦悩を通じて「どこかで／それなくしてはありえなかったような誇り，信念，／気高さ，高潔さ／が生じてくるのでなかったら，新しい力が与えられ，古い力がよみがえるのでなかったら／その責任は自然によるのでなく，われわれ人間にあるのだ」とのべ，暴力を憎みながらも，人間の本質に対する信頼はゆるがない。フランスが圧制者となり侵略者となって理想を裏ぎったあとでも，「より高い人間性を求め／人間が現在の幼虫のような状態から脱し／自由の翼を大きくひろげ／自らの主人となり，妨げられることのない喜びにひたること」を願った。こうして苦悩を乗り越え，「大自然自身が人間の愛／の助けを借りて……やりきれぬ迷路をぬけ／……広々とした明るい日光の中へわたしを導き／幼い頃の感情をよみがえらせ／平和にみちた力と知識を与えてくれた／――いっそう拡大され，二度と乱されることのないものとして」という。最後の十一三巻には再び想像力に対する力強い讃仰がある。

こうして希望，期待，挫折，魂の高揚が『序曲』を通じてくり返され，しめくくりとして，自分を「大自然の予言者」として自覚し，「理性と真理によって／神聖なものとされた永続的な霊感を／人々に語りかけよう」(XIII)という詩人の使命をうたう。

3

ワーズワスの想像力とは，「大きな本質的な力，想像力」(XIII)「真実を教える想像力」((XI)など詩人自身に定義されている。また次のようにいう。「想像力はわれわれの肉体の本質に奇蹟的と見えるような変化を及ぼす」「想像力は詩において，形成し生み出すもの」「魂をその力強い，ほとんど神聖な諸能力の自覚へと高める」など。想像力が働くのは「感覚的印象に心が奪われず，生き生きとさせられ，鼓舞させられ，そのために目に見えぬ世界との霊の交わりをもつの

に一層ふさわしくなる」(XIII)という状態においてである。それが宿るのは孤独 (solitude) においてである。『水仙の詩』に「孤独の至福」とうたったような境地を生み出す孤独，「最良の交わりよりももっと活発な孤独」(II)においてであり，それは次のようにものべられる。

「しばしばそんな瞬間には聖なる静かさが／わたしの魂をおおった，わたしは肉体の／目のあることを忘れ，わたしの見るものは／何かわたし自身の内なるもの，夢か／こころの風景のように見えた」(II)

『ティンターン』には「その晴朗な清らかな気分の中で／愛情がやさしくわたしを導き一／ついにはこの形あるからだの呼吸も／人間の血の運行すら止まり／肉体は眠り，一つの魂として生きる」とあるのも solitude の極致である。

政治革命に幻滅した彼は，なおもその理想の現世での復活を願い，こう歌った。

「パラダイス，エリュシオンの森／しあわせの野——大西洋の海に／求められた昔のそれらは……識別力ある人間の知性が／愛と聖なる情熱をもって，美しい／宇宙と結婚させられるとき，これらが／ふつうの日常の素朴な産物と知るだろう」

地上にパラダイスを実現する希望をあくまで捨てなかったのは，孤独の中に想像力を宿すことのできる人間精神への絶大の信頼によるのである。それのみが真の詩人を実現しうるものであるが，本質的には彼は詩人も一般人も変りがないものと考える。両者を区別するどころか，同一視しようとする。「詩人を作るのに役だつおもな性質は他の人々とその種類において違う点はなく，程度において違うだけだ。詩人が違うのは，直接の外部からの刺戟がなくても迅速に考え感じること，そうして内部に生じた思考感情を表現する，より大きな能力がある点である」(『抒情民謡集』序文，1800) とといい，精神の偉大さは万人の心に宿りうると考える。だから「人間の精神が，住む土地よりも／幾百倍もさらに美しくなるということ……神聖な実体と構造をこの精神がもっているために／事物よりもさらに美しく高められるということ」(XIII) を詩人が教えるとき，それは万人の心に根づく可能性がある。そのとき人類は永遠に救済され，地上のパラダイスが生じるはずである。

Solitude は自然への愛と，それとの融合の心的状態である。がそれは自己の他者，人間と社会からの離脱，逃避，もしくは背反を意味しない。自然への愛から詩人は人間への愛へみちびかれた。「まず人間を偉大な，また美しい（自然の）事物を通して見た／その事物の助けによって人間と魂のふれ合いをした」(VIII) という。さらに solitude の喜びは「人間の静かな，悲しい音楽を／聞き……高められた思想の喜びをもって（自然の中に）わたしの心をかき立てる，ある存在を感じた」ことによりもたらされた。

フランス革命は彼にとって，imagination が具体的な形をとつたものであり，革命は幻滅におわったが，imagination は大自然の力によって復活した(XI)。だから地上のパラダイスの可能性は依然として消えないはずである。その手がかりとなる imagination を生む solitude がどんな

人間の生き方に，実際に恒常的日常的に具現しうるものであるかが，詩人の強い関心事であった。

4

『序曲』と同じ頃書かれた詩には solitude に生きる人間，それを体現する具体的人間が描かれる。刹那的感動や陶酔は希望を継続させることはできても，地上的な実現を確実にするものではない。solitude を日常としそれに生きる人間の中に軌範が求められなければならない。『カンバランドの老乞食』はその一例である。乞食という，社会の脱落者というべき人間をとり上げたのは，自然との交流を妨げる，世俗的なすべてのものをはぎとった生き方をそこに見たからである。詩人は同じ姿を『動物の静かさと衰え』にとらえた。

「その顔，歩み／速度に一つの表情がある……すべて（の様子）は苦痛でなく／思想をもって動く人を示す――彼こそは無意識に，和らげられ／落着いた静穏を身につけた。彼こそすべての労苦を忘れたような人，／長い忍耐が温和な自若さを与え／忍耐はもはや必要とせぬよう，自然により完全な平和にみちびかれ／若い者は羨み見るが，老人の感じもしないこと」

だがこれは人生の苦難の連鎖の中で一瞬示した老人の一断面にすぎない。彼は旅の途上にあり，行手には現世の不幸な事態が待ち構えている。一方，老乞食は村の社会に確固とした根を張っているようである。常識社会から見れば，悲劇的で，無用な，「この世の重荷」のような存在であるが，彼を包む人々と平和な調和した関係で結ばれている。しかも悠々たる孤独を守りながら，自然と密着した生を生きている。彼自身の世界といえば，足もとの視界のひと区切りの地面だけ。その地面は，世の騒音，悲哀，相克から完全に遮断された沈黙と孤独の世界である。老人はもはや現実の肉体を失なった，ひっそりと静かな，幻のような存在となつている。絶えず歩き続ける姿だけを村人に印象づける彼は，ひとりの旅人であり，自然そのもの，動く自然と化している。初めもなく終りもない旅のように見える老人の生は，あたかも自然が見せる外観と同じである。老人は自然と一体化し，その一部となっている。自然は人間に語りかけない。詩人のみがその語りかける言葉「一つの表情」の意味を知る。だが前述のように，旅する老人が見せた，過ぎ去る束の間の存在ではなくて，村人の社会の一員といえる役割を果している。村人はその姿を見るだけで，暖い気持をかきたてられ，いたわりでそっと包みながら，彼を静かに通過させてやる。一戸ごとに彼が回ると，村人たちはその生涯を読みとり，慈善と愛の心をとり戻す。「歳月の経過と，なまはんかな経験が与える不十分な知恵が，感情を鈍らせ，着実に利己主義，冷淡な忘れっぽい関心に任せてしまうような，心のやさしい気持を」絶やさずにおいてくれる。その喜びのために，村人の心に徳と善行が保たれる。老乞食自身はといえば，

「物事の流れに運ばれ／広大な孤独の中に生きる(あいだ)，彼はただ自分自身のためにだけ呼

吸し生きるかのよう／咎められもせず，害されることもなく……」

だが彼の住む孤独も実は不安定な仮りの状態でしかなく，永続する見込みはうすい。現実の社会制度が彼の自由を奪い，救貧院収容という嫌うべき未来を用意しているからである。

『白痴の少年』はきわめて特殊な世界でありながら，solitude の特続として詩人の心をとらえたものである。少年は生れつき常人の知能を欠いているが，その代り常人にうかがい知れない神秘世界に住む。障害のために，ワーズワスが想像力豊かな時期として神聖視した幼年期に永遠に住む。小馬の背にのり道に迷って一夜を深い森の中で過した少年の幻想世界は，現実社会の妨害の中で一般人が及びえない solitude そのものを生きている。「耳を澄ますが何も聞えず／馬のひずめも，人声すらも／川の流れもひっそり静まり／草ののびだす音までしそう／それがするなら，今こそそれだ」

この静寂の中で，少年は老乞食を包むのと同じ静かさの中に住む。また同じ自然の声を聞いている。もともと少年は常識世界を抜け出たところに生き，常識世界の言葉もない境界に住む。「ベティに聞かれてジョニイ（少年）は／臆せぬ旅人のように答えた／『おんどりが鳴いてたよ，トウー，トウー，お日様が寒く照つていたよ！』——これがジョニイの得意げな答え／そしてジョニイの旅のすべてだ」

この詩を書こうとして，ワーズワスはそれを即興的に作ったという事情をのべ，「あの幸福な瞬間……こんな喜びをもって作品を書いたことはない」という。少年の世界が想像力に充されたものとして詩人に映じたからである。少年の言葉は「人間の情熱が美しい永久的な自然の形象と一体化した」(『抒情民謡集』序文，1800）「またそこから最良の言語が本来生れた，最良の事物と交わっている」ような状態を原初までさかのぼったところにある。そこに感動の象徴ではなく，事物自体であるような，それ自体感動であるような「真の言語」(real language）を見た。自然の反応と詩との生き生きしたつながりの回復を求めたワーズワスは少年の言葉をsolitudeの言語的表現と見て，喜びに充されたのである。だが，むろん白痴の少年はその喜びにあずからせてはくれるが，正常人としてのパラダイスへの鍵を与えてくれるわけではない。『ルーシィ・グレイ』や『マイクル』の solitude がメルヘン的，また寓話的世界でしかありえないのと同じである。

5

『エクスカーシャン』に至って，地上のパラダイスへの願望はもっと明確な人物像に具象化される。孤独を負い，老乞食のように自由に生きながら，しかも人間社会との暖いつながりを持ち続け，しかも生活者としての自立した職業をもつ遍歴者（Wanderer）が，一つの理想的な生き方として浮んでいる。彼は自然に包まれて生長し，幼くして「偉大なものの存在と力」を知っ

た。「自然によって強く感じることを教えられ……愛の深い教えを学んだ」(ｉ)といいワーズワスと同一視される人物で，孤独に生きながら，日々の渇望の中で自分に何ができるかを思い悩んだ。行商人の仕事を選んだのは壮麗な自然と不断の霊交を保ち，人間社会の拘束に閉ざされず，距離をおいて人間の悲しい運命を見ることができ，「人間，習慣，喜びと仕事，情熱と感情を」とくに田舎の単純な生活の中で，粗朴に生き飾りけのない言葉を話す人々の間に見ながら，自由に遍歴する，喜びのためである。重い荷物をもって遠路を辿る難儀はあつても，辺鄙な田舎の人たちのささやかな必要と娯楽をみたす満足感によって報いられた。野山を歩くとき，孤独の中でただ一人の思索にふけり，落着いた愛情の中に心を保つことができた。「その心は普通の生活の煩らいに曇らされることもなく，片よったきずなに苛立たせられることも，歪められることもなく，晴朗そのものであった」(ｉ)。こうして得た金銭の貯えによって，現在は「不要な仕事を課せられず，困苦から免れ，仕事をやめて，安楽に暮している」そして今もなお遍歴を愛し世事に煩わされることなく，杖ひとつで悠々と遠近を歩き回ってている。彼の心は豊かにあふれ，至るところで微笑をもって迎えられる。生業に忙しい富貴の人もその喜びにはかなわない。そののどかな生活をもたらした行商の職業がたたえられる。「自然の素朴な要求をみたすために，山や谷を荷物をもって横ぎり……正直な生活の資以外の報酬はなく……ゆったりした足どりが観察のゆとりを与え，孤独によって精神は感じることができる……どこへ行こうと自然は豊かで，やさしい自然の様々な富はすべて行商人のもの，人々の性格にも通暁できる……」それはワーズワスの想念に浮かんだ一つの理想像である。だがそのロマンチツクな側面をもつ職業も産業主義の進行によつて駆逐されようとしている。田舎での素朴な純真な役割はもう過去のものとなつた。「発明の時代」が「戦争のような貪欲さで，昼夜とも休まず，破壊のために働き，強力な機械」で新しい製品を生み出す」(viii)。孤独の歩行者として行商人が乏しい商品をせおって難渋して歩き，「求められ，観迎された」古い誇りをもつ辺鄙な地方の村から，「やつと見分けられるような小径，恐ろしく長い水たまりの多い道」は駆逐され，堂々たる道が「ブリテンの果ての，ほの暗い谷までも」四通八達し，物資の流通が容易となった。貧しい小村の代りに巨大な町が生れ大地の顔は消え去り，家もなかった場所に人家が密集している。観念的にせよ，行商人に solitude の確かなよりどころを求めようとする期待は裏ぎられる。『エクスカーシヤン』でワーズワス自身の投影は山間ふかく隠棲する孤独者（Solitary）に最もよく現われる。

厭世と懐疑におおわれた彼は最愛の家族を失ない，バスチーユ陥落に電光のように打たれ，革命と自由への情熱を燃え上らせたが，その期待をくだかれ，絶望して現在の山間の孤独生活に頑なに自分を閉じこめている。

「いま，わたしの仕事はひろく歩き回り，観察し，感じないようにすること，それ故，行動しないことです――わたしの確信は，すべて行動の名をもつものは，最初はどうあろうと，最後は必ず苦痛であり，多くは無益となるだけだということです」(iii)。彼にとって人生とは，「静か

な山川の流れが，複雑な迷路，急激な落下，やっかいな隘路などを通り抜けて，一時的に静かに流れているようなもの。じきに同じ障害，苦難に会わなければならない」

「そんな流れこそ／人間の生命だ，精神は／できるだけ平穏を保つて，許された進路へとおもむく／それこそわたしの人生だ——ただ次の望みがあるだけ／このわたしの流れはやがては／計り知れぬ深みに辿りつき，そこではすべてが動きをやめてしまう！」(iii)

彼は絶望と厭世にとざされ一切の世事と没交渉に生きようとする。しかし遍歴者と牧師の能弁とはかみ合わないにしても，人間嫌いではなく，平生は子供たちと遊び，また友人をみすぼらしい小屋であるがその家に喜んで迎え入れ，山の産物で歓待する。遍歴者たちのような自然に対する恍惚たる讃美と大袈裟な感動は示さないが，自然の中に融けこんだ生活を静かに楽しんでいる。次の一節には波らんのない日々で，淡々と生きる調和と諦観の静かな充足感がある。

「快い響きをあげて吹き過ぎる風は／岩石，森，洞窟，荒野，奔流の川岸から／さまざまな調べを引き出す，／（家の前面に）そそり立つ二つの巨峯が，荒々しい合奏に加わる——おもに嵐が強まるときに／……また自然の法則により／さらに美しい調べの音楽が得られる，諧調と／わたしは呼ぼうか，それが沈黙の手であり，声は聞えないにしても。——雲，／霧，物影，きらめく日光，／月影の動き，みなここを訪れ，——手を触れ，／答えを得る——ここに訪れ，病める心，働かぬ魂すら迎えなくはない言葉を作る……／あの高峰のあいだ，／二つの尖塔の頂きでは／夜の蒼穹のもとで，他処よりも強く／星屑がきらめく／その位置を誇るかのごとく。／そこに動めく声なき物象は／人間の心にめぐる思いよりも忙しい——／ただひとり，ここにわたしは坐って見守る——」(ii)

地上のパラダイスの高揚はないが，冷徹な目で地上の運命を観じながら，自然に浸る悠々たる日々がそこにある。一般人々とっての救済とはならないにせよ，ワーズワスの憧憬の一つの帰結である。が現実生活の中で同じ隠棲は実現不能であったし，「さらば，さらば，ただ一人生きる魂よ／同胞より離れ，夢に住む魂よ／その幸福は，どこにあろうとも／憐れむべきものだ，確かにそれは盲目なのだから」(『ピール城の絵から』) というように，魂の真の平安をもたらすものではない。山間の隠者もその孤独に完全に満足し晏如としているわけではなく，それを現実逃避に終らせないための焦慮と苦悩の影をにじませている。だから遍歴者が，「魂の中には……本来の輝きを高める能力がある……（大きな月がひろびろした，明るい力で暗闇のヴェールを輝くものに変えるように）同じ力が人間の神聖な魂に宿る。／こうして徳（virtue）が生れ出て，大きくなり，／こうして現世の様々な障害から，過ち，挫折——いや罪からさえ，／また，時には，やさしい正義の命ずるままに／絶望の明らかな圧迫から，美しく，静かな焔を育てる」(iv) というとき，孤独者はたとえ，「だが，どうやって始めたらよいのか？　どこから？」という苛立たしい反問によってであるにせよ，あらわな強い感動を示すのである。遍歴者の言葉では virtue が imagination に代っている。遍歴者が説くのは義務の強調である。

「隔離は祝福すべきものだ！　心が／義務の法則を受け入れるときは。そして／得失の転変を経ながら，義務の選択に完全に満足して結ばれているときは」といい，「必ず心を悩ますいばらのような過去と，未来のとりとめない幻影にすぎぬ暗くわびしい夢」をふり捨てよ，といい「悲哀が生ずるのは，人間の弱さによる」とする。『義務によせるオード』にも「おお，義務よ……それは弱い人間の苛だたしいもがきを沈静させる」といい，「われわれの日毎，夜ごとがのどかになり／われわれの本性も幸福になるのは愛が誤まることのない光明となり／喜びがそれ自身の保証となるとき」と日々の義務を果すことに安んじようと願う。『序曲』から『エクスカーシャン』への過程で，自己に対する厳しい再検討を加えながら，知的倫理的支柱を失なつた自己の存在の回復と確立，グラスミア隠棲を自己満足的な現実逃避に終わらせまいとする詩人自身の懸命の努力の跡が認められる。初期の自由への願望は不変であったがその質が変り，ナポレオンの侵略戦争が，国家の自由の目標へ向わせた。革命への幻滅はそれに同情的なホイグ党を非現実的であるとしてトーリ党へ向わせた。革命の無法を引き起した民衆の無知を救うために国家による教育を強く説くなど，現実受容の中で精一杯の努力を試みるのが彼の唯一の選択であつた。が，あくま的で地上のパラダイスの願望は捨てていない。「だから……わたしは待つ——正しい大義が／熱狂的献身的な擁護者を獲得し，徳が／その要求ほど高潔でない限界を許さない時が来るのを望みながら……人間が自分自身を超えて自己を高めることができないとしたら，人間とはなんと哀れなものだろうか！」と遍歴者の口を借りていう。

《注—かっこ内のローマン数字は『序曲』の各章を，小文字の数字は『エクスカーシャン』の各章をそれぞれ示す》